

生きた言語活動から主体的に学ぶ児童の育成

～地域の文化財「八瀬家住宅」の子どもガイドを通して～

兵庫県たつの市立揖西東小学校
教諭 酒谷 智史

1 はじめに

本校の校区には東西に古代山陽道が通過しており、その沿道には数々の歴史的あるいは文化的な遺跡や名所、先人が数多く存在する。児童は毎日、その古代山陽道を通学路にして登校している。しかし、その歴史や地域の文化財について学ぶ機会は少ない。そのため、貴重な教材に触れることなく卒業し、そのまま故郷を離れる者も多い。

そこで平成27年度から、6年生の総合的な学習の時間に『私たちの地域に学ぼう』～伝えよう先人の歴史・功績～と題して地域学習をすることにした。

ここでは、その中の「八瀬家住宅公開」へ向けた取り組みを中心に述べていく。

2 主題設定の理由

(1) 児童の実態

児童に、地域の文化財や先人についてアンケートしたところ、ほとんどが詳しく知らない、全く知らないと回答した。それが自宅の近所にあったとしても、存在さえ知らないという児童もいた。社会科では、日本の歴史について関心が高いにもかかわらず、それと地域の歴史とがリンクしていない児童が多い。

また、多くの児童の学習意欲は高く、学習内容をインプットすることが得意である。しかし、学習したことを外に向けて発信するアウトプットの体験は非常に少なく、教室内での発表にとどまることが多い。

(2) 仮説

インパクトのある教材や人との出会いは、児童の学習意欲を引き出し、アウトプットする場を演出すれば主体的に学ぶ児童が育つのではないかと。

3 1年目の実践と考察

『私たちの地域に学ぼう』

～伝えよう先人の歴史・功績～

このプロジェクトを通して、児童に身に付けさせたい力は次の4点である。

①不思議や疑問を自らが感じ取り、それらを調べて

追究していく力。

②多くの人との関わりの中での対人関係能力。(人と関わる力)

③自分たちが学習してきたことを分かりやすく伝える力。(生きた言語活動)

④自分たちが住む揖西東小学校区に対する誇り。

(1) ゲストティーチャーから学ぶ

校区の文化財や史跡、先人について全く知らないという児童が多かったことから、それらを大まかに知るところからスタートした。地域の歴史について詳しい人は誰かいないかと児童に尋ねたところ、校区にボランティアで観光ガイドをされている方がいらっしやるのがわかった。その方をゲストティーチャーに招き、講義をしていただいた。古代山陽道をはじめ、校区にある弥生～平安時代にかけての住居遺跡、奇祭さいれん坊主の行われる恩徳寺、大庄屋八瀬家住宅、江戸時代の一揆の指導者水谷又兵衛、陸軍大将田中静老氏、哲学者三木清氏など、様々な歴史的事実、校区に生きた先人やその物語を教えていただいた。この講義により児童は多くの先人や文化財と出会い、後の学習をすすめていく上での基礎的な知識を得ることができた。

特に、自分たちの通学路が古代の幹線道路であり、当時外国からの賓客が駅伝制を使って都に向かっていったことや、自分たちの家の下に奈良時代の遺跡が眠っていることに、驚きを隠せない様子であった。

(2) 八瀬家住宅

講義を聴いた後、児童らは放課後や休日に実際に各所へ足を運び、史跡にふれることができた。しかし、一件だけは門が固く閉ざされ、その様子をうかがい知ることができないものがあった。それが八瀬家住宅である。

八瀬家住宅は、たつの市指定文化財である。江戸時代から続く大庄屋で、藩の出先機関として機能し、村々にあった庄屋を統括する役目を務めた。現存する屋敷は、1792(寛政4)年には建てられていたことが

記録に残っている。20年ほど前まで、住居として利用されていた。

八瀬家住宅は、11月下旬に一般公開されている。児童から、どうしても中の様子を見学したいという声があがった。そこで、たつの市教育委員会文化財課へ見学の依頼をしたところ、内部を見せていただけることになった。

(3) 八瀬家住宅との出会い

～八瀬家住宅訪問～（講師：文化財課 岸本氏）

初めての八瀬家訪問。大きな長屋門が開かれたとき、立派な茅葺き屋根、目の前に広がる手入れの行き届いた庭園に児童らは圧倒された。文化財課の岸本氏を講師として、八瀬家についての歴史やエピソードを聞かせていただいた。歴史や家屋の造り、庭に関する内容まで幅広く教えていただいた。子どもたちはメモをとりながら真剣に聞き、細かいことでもワークシートに記録していた。

その中で児童は、この住宅には百姓が出入りする土間の玄関、武士の使う式土玄関、藩主専用の御成門といった当時の身分に応じた玄関が存在すると知った。教科書で学習した身分制が自分たちの町でも運用されていたことを目の当たりにした。

見学、学習をすすめるなかで児童は11月に行われる八瀬家住宅公開に、自分たちも参加し来訪者をガイドしたいと考えるようになった。

(4) タブレット端末の導入

平成27年度から、たつの市の取り組みとして、各学校へ段階的にタブレット端末を導入することになった。本校は先行導入の対象校となった。そこで、タブレット端末を活用したガイドのあり方を児童とともに考えた。Wi-Fiタイプのタブレット端末のため、現地ではインターネットや端末どうしのやりとりはできない。そこで、ローカルに保存された、前もって現場で撮影しておいた画像を来訪者に提示することにした。

八瀬家住宅は、

①室内展示がおこなわれる。

②庭園は、通れる道が限られている。

などから、来訪者に付き添ってガイドするのではなく、各ガイドポイントに児童が立ち、来訪者を待ち受ける形式にすることにした。

(5) 子どもガイドに向けた情報収集

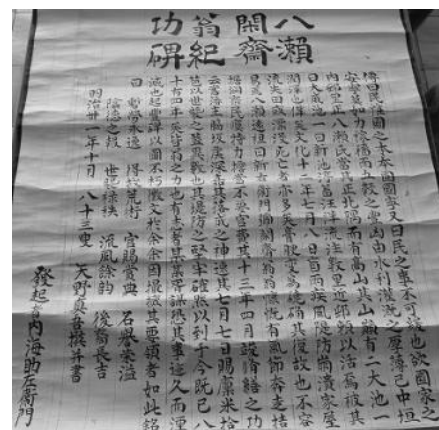
第1回八瀬家住宅訪問で市文化財課担当者から教えていただいた内容や、八瀬家住宅のパンフレットに書いてあること、龍野市史などの各種文献資料をもとにして、6年生全員が役割分担して作り上げることとした。教えて頂いたことやパンフレットの内容の中には、小学生では難しい語句も多く含まれていたことため、語句の意味を調べるが多くあった。また、語句を調べる過程で新たに疑問をもったことを調べていった。

(6) 八瀬家旧所有者（元当主）との出会い

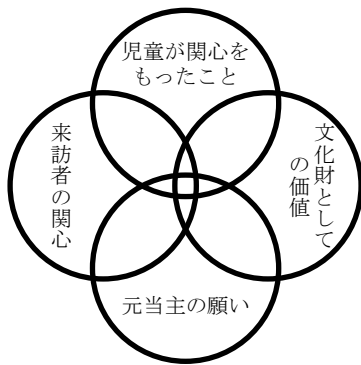
～第2回八瀬家住宅訪問～（公開1ヶ月前）

本格的なガイドをするため、現物を見て確認する必要があると感じ、再度八瀬家を訪問した。この時初めて、元当主の八瀬正寿氏とお会いした。八瀬氏からは、江戸時代から名字があったこと、刀や槍が何本もあったこと、藩の武士と地域の百姓とが祭りの際に口論になったという日記が残っていることなど、かつてここに生きた人々の息遣いが聞こえてくるようなお話を聞くことができた。児童は、「百姓でも名字がある人がいたの?」「秀吉の刀狩りで、武士以外は刀を取り上げられたんじゃないの?」「百姓は武士の言いなりではなかったの?」と、疑問をもった。日本全国に「一本道の歴史」が流れているのではなく、「地域には地域の歴史がある。」と実感することになった。

帰り際、八瀬氏は住宅の文化財としての価値だけでなく、ここに生活した先祖が地域に人々のために貢献したことをぜひ伝えてほしいと依頼された。八瀬氏から、文化12年（1815年）八瀬家住宅の北にあるため池の決壊時に、当時の当主が私財を投じて池の修復をしたことや炊き出しで一帯の百姓を助けた功績について記録された巻物を預かり受けた。



(7) 内容の精選



ここまで児童達はインタビュー、調査、各種文献資料にあたり、膨大な量の情報を手にしていた。子どもガイドが単なる記録の再生になってしまわないよう、集めた情報を検証、整理し、必要かつ十分なものに精選する作業を行った。その後文化財課にガイドの内容を添削していただき誤りがないかをチェックしていただいた。

また、当日来訪者にプレゼントするしおりを作成した。しおりには「ようこそ八瀬家へ」の文字を手書きし、小さな写真と共にラミネートし、350個作成した。「これが全部なくなるほどお客さんが来ればいいな。」と児童が話していた。



(8) リハーサル

～第3回八瀬家住宅訪問～（公開1週間前）

タブレット端末に必要な画像を取り込み、実際に児童同士でガイドをしてみる。屋外で端末を使うと思いの外、日光や景色が画面に映り込み、来訪者に見えづらいうことに気づいた。画面を前傾させたり、日陰を利用したりする工夫をした。

タブレット端末を活用して児童が文化財をガイドするというところで、地域社会からの関心は非常に高かった。リハーサルには新聞社から取材があった。

取材を受けたことで、自分たちの学習が社会から関心を持たれているという確信をもった。それと同時に、情報の発信者として、責任ある行動が求められると知った。

～第4回八瀬家住宅訪問～（公開前日）

当日実際に自分が担当する場所へ行き、お客さん役を待ち構えるよう本番を想定してリハーサルをした。来訪者の大半は高齢者が想定される。そして、歴史や

芸術関係に非常に関心の高い方も来訪される。児童同士で講評し合い、「今のだと説明では速すぎてお年寄りには伝わらない。」「姿勢を低くして子どもの目線に合わせよう。」「お客様から質問されたら答えられないよ。明日までに調べておこう。」と必死だった。

(9) 八瀬家住宅公開当日

公開は10時から16時までだ。児童は2時間ごとの3班編成で1日のガイドをすることにし、事前に時間と担当場所を決めておいた。

11月28日（土）・29日（日）、待ちに待った午前10時。公開時間になり開門した。そこにはたくさんのお客さんが列をなして待たれていた。来訪者にガイドする中で、「屋敷の梁の木材は何?」「茅葺き屋根は何年ごとに修繕しているの?費用は?」と、事前に想定していなかった質問を受けることがあった。児童らは文化財課の方や、元当主に確認に走った。それを次の班に引き継ぐようにした。

タブレットの使い方も上手になり、拡大操作を効果的に使ったり、説明に効果的な写真を自分で選び提示した、さらにあえてタブレットを使わないで説明したりできていた。

来訪者から子どもガイドに対して、「ありがとう。」「よく調べたね。」「へー、これ（タブレット）でも見られるの。よくわかるねえ。」など、温かいお言葉をたくさんいただいた。これらが励みとなり、子どものやる気にいっそう火が付いていた。



(10) 考察

<児童の感想>

この活動で、人前で堂々と話す力が付いたと思います。学校の人以外の前で話す機会なんてそんなに多くはないので、よい機会だと思いました。
(原文のまま)

私は、八瀬家ガイドをしてよかったです。このガイドをすることで私の説明する力がよくなったからです。もう一つは、お客様一人ひとりから「ありがとう」と言われてうれしかったからです。お客様の言葉でやる気が出てきて、いいガイドができました。うれしいことがいっぱいでした。来年の6年生にも受け継いでもらいたいです。
(原文のまま)

受付をがんばりました。最初「いらっしやいませ!」「明日も来てください!」と大声で言ったけど、何かちがうと思いました。みんなしずかに見ていました。(原文のまま)

ガイドをして、人と話す力がついたと思います。今までははずかしがって初対面の人とはあまりしゃべらなかつたけれど、今日のガイドでかなり克服できました。でも、声が小さくて「えっ?」と聞き返されることがあったので、今度からは間違えてもいいから大きな声でちゃんと聞こえるように話したいです。(原文のまま)

来訪者とやりとりする中で賞賛されたり、意外な反応をされたり、うまく伝わらなかつたりした。時、場所、場面、相手に応じた話し方や工夫が必要だと実感していた。事後のアンケートでは参加した児童の8割が「楽しかった。」と回答した。さらに、人と話すことが苦手な児童が「またやってみたい。」と感想に書いていた。このプロジェクトを通してつけさせたい4点の力に迫ることができたと言える。そして来訪者は例年約200人だが、この年は約350人をお迎えできた。「自分たちの学習活動は、社会の人々を変容させる可能性がある。」と希望をもつ機会にもなった。

4 2年目の実践と考察

(1) さらなる主体性をめざして

1年目は学習自体が手探りの状態だったが、平成28年度の児童は、前年度の「八瀬家住宅公開子どもガイド」をする先輩達の姿をみている。4月の時点で、「自分たちもガイドしたい。」と多くの児童が思っていた。2学期に入るとすぐに児童から、「地域のことを学習したい。」「八瀬家住宅以外の文化財も紹介したい。」という声がきかれるほどだった。

11月12日(土)13日(日)の2日間にわたって行われた八瀬家住宅公開では500人以上の来訪者

をお迎えし、大盛況となった。

(2) 考察

多くの卒業生も来訪者として駆けつけた。自分たちが始めた取り組みが受けつがれる喜び、市外、県外からの来訪者を目の当たりにする感動の表情であった。

そして6年生が文化財をガイドする姿は、本校の児童にとって憧れであり、「自分も6年生になったらやってみたい。」と考えている。このことは良い「かくれたカリキュラム」として機能し始めている。

5 成果と課題

○インパクトのある教材(八瀬家住宅)や人(専門家、元当主、来訪者など)との出会いをきっかけに児童は、「もっと知りたい、伝えてみたい。」と考え、「八瀬家住宅公開子どもガイド」というアウトプットの場を設けることで、情報の発信者として学びの必然性が生まれた。

○ガイドする内容を自分たちで考え、決める活動をする中で、主体的に調べる力、分かりやすく伝えるための工夫を考える経験、また伝える経験ができた。

○次期学習指導要領へ向けての課題でも述べられているように、「何を知ったか」だけが重要なのではなく、「知ったことを使って何ができるようになったか」に重点が置かれる。今回のプロジェクトでは、児童の感想にもあるように、出来るようになったことがはっきりしている。これからは生活に生きて働く力として、更に伸ばしていきたい。

●1, 2年目ともに、2日目の来訪者から「新聞記事を見て、あわてて来た。公開のことをもっと広報してほしい。」と要望があった。

5 おわりに(3年目の実践に向けて)

年々増えている来訪者。その数が児童の達成感と比例するものがある。学習した児童にとっては、「社会は自分たちの力で変えることができる。」という確信となっている。さらに多くの方に八瀬家住宅公開のこと、児童の学習のことを知っていただくために、どこでどのような広報活動を行うと効果的なのか考えることもおもしろそうだ。今後も、児童にとってより良い学びの機会となるよう、さらなる工夫と改善を行っていき